全学院教職員礼拝

光の子として歩みなさい

学長　長谷部　弘

今日の御言葉です。エフェソの信徒への手紙５章 1〜10 節を朗読します。

> あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。だから、彼らの仲間に引き入れられないようにしなさい。あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。――光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。――何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。

今日の説教のタイトルは、今朗読したエフェソの信徒への手紙５章８節後半にある「光の子として歩みなさい」から取りました。

このフレイズを聞いた皆さんの中には、すぐにトルストイの『光あるうちに光の中を歩め』という短編作品のことを思い浮かべる方もおられるかもしれません。私は青年時代のある時期、ドストエスフキーやトルストイに代表されるロシア文学の作品を読み漁ったことがあったのですが、その頃はロシア文学好きが結構おられたようで、このトルストイの作品はしばしば引用されていたものです。私は今も、この聖書箇所を読むたびに、トルストイのこの小説を想起します。作品の背景はトラヤヌス帝（在位：98-117 年）が支配する古代ローマ帝国の時代。物語は俗世間に生きる豪商ユリウスと、クリスチャンとして純粋に生きようとするパンフィリウスとの対話で構成されます。この小説が読み継がれてきたのも、ロシアのみならず世俗化の進んだ欧米の近代社会でさえ、なお、聖書の信仰を持って良く生きるという古典的テーマが、陰に陽に人生上のモチーフとなり続けてきたからでもあり、今日は、この「良く生きる」ということについて、聖書はどのような意味で私たちに語ろうとしているか、確認してみたいと思います。

まず、最初に、今日引用した「エフェソの信徒への手紙」ですが、この手紙は、使徒パウロによって書かれたものとされています。彼は、ご承知のように、エーゲ海周辺の小アジアからマケドニア、ギリシャ地方を歩き回り、ディアスポラ（散らされた）のユダヤ人や現地のギリシャ人といった、当時の生粋のユダヤ人から見ると異邦人とされていた人々への伝道に大活躍した人物です。

彼は、使徒言行録によると三回の伝道の旅を行いましたが、第二回目の旅行時にエフェ

ソという小アジアの商業都市へと立ち寄り、第三回目の旅ではそこに二年三ヶ月の間滞在しました。ギリシャの哲学や諸宗教を相手にしながら、イエス・キリストの福音を説き、かなり大きなクリスチャンの群れ、集団を育てました。そこではアルテミスの神殿宗教との激しい対立も経験しました（祭具商デメテリオの迫害）。パウロはその二〜三年後、紀元 61 年頃、裁判のために送られたローマで、エフェソの教会に宛てた手紙を書き送っています。獄中からです。それが今日取り上げたエフェソの信徒への手紙です。

パウロは、エフェソの教会に集う人々にあてて、イエス・キリストの十字架と復活の業に示された神の大きな恵みを賛美し、その恵みをうける者としてふさわしい良い生き方を奨励します。全体で 6 章からなる短い手紙ではありますが、その前半 3 章がイエス・キリストの福音の内容について、そして後半の 3 章が恵みのうちに生きる人々にとって望ましい生活、良い生活について記されています。

実は、前半の冒頭第 1 章の 17 節以下で、パウロは次のような願いをエフェソの人々に向けて書いています。

> 「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように」。

つまり、救いの源である神というお方を深く知り、そこからいただく福音がどれほど尊い価値あるものか、どれほど大きなものであるかを知ってもらいたい、そうパウロは言うのです。この手紙においてパウロは、すでに最初から、イエス・キリストの父なる神は光り輝く存在、栄光の源とされ、私たち一人ひとりがその光、栄光を受けながら生きることが良い生き方なのだ、だからイエスを信じるものは皆そのような生き方をして貰いたいのだ、そんな希望を語っているわけです。

さらに 2 章 8〜10 節で、

> 「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」。

このように書くことによって、パウロは、私たち人間は自分の良い行いによって救われるのではなく、神様の側からの恵みにより救われるのであり、その救いを信じる信仰によって救いに入れられるのだ、という、いわゆる「信仰義認論」が展開されます。「善い業」、すなわち良い行いとは、自分が行なって自分で誇るためのものではない。そうではなく、神様が前もって準備してくださっていることによって可能となるものなのだ。だから、良い行いを、自分を誇るためではなく、イエス・キリストがそうであったように、ごくあたり前の行いとして実践して歩みんでいきましょう、と語るのです。

彼は、イエス・キリストにおいて創造された新しい生き方として 4 章 25 節以下で、善き業、良い行いの事例をたくさん挙げます。それらは、偽りではなく、真実を語ること。たとえ怒ることがあっても、罪を犯さず、日が暮れるまで怒ったままでいないこと。盗みを働いていた者は、今からは盗みをしないこと。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにすること。悪い言葉を一切口にしないこと。聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語ること。悪意と一緒に無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを捨てること。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように互いに赦し合うこと等々、です。

こんな良い行いを堂々と人々に勧めることができる根拠は、パウロ自身の救いの体験です。私たちは神にこよなく愛されているのだから、神のみむねに倣う者となりなさい、という原則です。神の愛に依り頼んで、神が私たちにしてくださっているような愛の業、善き業を行なって歩め、というものです。

パウロは、みだらな者、汚れた者、また貪欲な者は神ならぬものを神として仕えている偶像礼拝者に他ならないのだから、キリストと神との国を受け継ぐことはできないのだ。このことをよくわきまえるように、と諭します。悪い行いをすることは、それ自身、神の怒りが下ってしまっているのだ、自らすでに救いや恵みの外部に歩んでいるのだというのです。

そして語られるのが、8 節以下の「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。――光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。――何が主に喜ばれるかを吟味しなさい」というメッセージなのです。

この手紙は、論者によって真逆の評価がなされてきました。総じて、生ける神との親しい交わりのうちに信仰を豊かに蓄えている人にとっては、珠玉のように輝く貴重な御言葉のメッセージとして受け取られ、逆に、神とは疎遠な、人間の側の理性や経験だけを強調する人にとっては、つまらない凡庸な宗教的説教、実現可能性のない道徳的な宗教的勧め、として評価されてきたようです。そう、トルストイの『光あるうちに光の中を歩め』に出てくる俗世間を代表する豪商ユリウスと、クリスチャンとして純粋に生きようとするパンフィリウスのように、です。

ちなみに、『キリスト教綱要』の著者であり、クリスチャンの厳格な道徳的生き方を強調し良き業を人々に勧めたことで有名な 16 世紀の宗教改革者ジャン・カルヴァンは、このエフェソの信徒への手紙を愛読の書の一つとしていたそうです。

宮城学院の教職員の皆さんは、就職時の採用条件として「キリスト教に理解があること」という採用条件のもと、本学の教職員となっていただいています。すでにクリスチャンである方にとっては、何の苦もない良い採用条件でしょう。しかし、そうは言っても、キリスト教への理解といっても、人によって濃淡様々だと思われます。あるいは礼拝に出席してキリスト教の説教を聞かせられることなど、不本意だ、と考えておられる方もおられるかもしれない。

しかし、私はこう思うのです。初代教会において、クリスチャンとクリスチャンでない者を判然と区別する制度的な隔てはまだみられませんでした（もしかすると現代の日本のキリスト教会では、内面的な信仰理解の実態において両者の実質的な隔てが逆の意味でなくなりつつあるのかもしれない。危機的な状態です）。その意味では、初代教会も、現在の宮城学院も、礼拝が行われ、礼拝が中心とされている、という意味で、そう大きな違いはないと考えて

みても良いかもしれない。この手紙の1章の23節で、パウロが、「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」と言っていることを、宮城学院にも当てはめて考えてみることもあながち不可能なことではないでしょう。

さらに私は思うのです。たとえ皆さんの中にキリスト教の教理や信条を受け入れがたいと思われる方々がおられたとしても、それ自身は問題ではない・・。礼拝を中心として聖書のメッセージがしっかりと語り続けられ、イエス・キリストの福音を語り続ける限り、そこには神様の大きな恵みの業が必ずや働いてくださるからだ、と・・。

私たちは、福音に示される神のとてつもなく大きな、愛と恵みを経験する時、イエス・キリストを信じ、イエス・キリストに従って歩む生き方、すなわち善き業、良い行いを実践する生き方へと強く促されることになります。それは、神の和解と平和という豊かな恵みに与る「新しい生き方」へ不断に導く神の大きな力であり、希望に他なりません。その力と希望に信頼して、歩んでいきたいと思うのです。

教職員の皆さんと共に、これからも教職員礼拝を通して神様の恵みを豊かに分かち合い、互いに励まし合いながら、「光の子」として歩んでまいりましょう。そして、福音に裏打ちされた宮城学院の使命を果たしてまいりましょう。　　（2024年5月22日）